

みことばによって成長する群れ

使徒 17 : 10 ~ 14

私たちの教会の名前は蜚池聖書教会です。名前からすぐにイメージされるのは聖書を教会の中心にしている教会だと思われることです。その通りなのですが聖書教会と名前がついてなくてもキリスト教会は最初は聖書のみことばによって誕生し、そして聖書のみことばによって成長してゆきます。

今日は聖書のみことばによって生み出され、聖書のみことばによって成長し続けたベレヤにあった教会のことが出てきます。もちろんベレヤの教会だけが聖書を読むことに熱心で他の教会は聖書を読むことにそれほど熱心でなかったわけではありません。どの教会ももちろんみことばによって成長した群です。それでもこの教会の歩みから教会が成長してゆくための秘訣と言いましょか大切な部分を学ぶことが出来ると思うのです。どのような点から学ぶことができるのでしょうか？

1) みことば以前の問題

11 節に「このユダヤ人はテサロニケにいる者たちよりも良い人たちで」と書かれています。ここで出てくる「良い」と訳されていることばは元々は「高貴な生まれ」とか「心を自由に広げている」という意味です。簡単に言うなら育ちが良いとか自由に発想できる人たちであったということです。テサロニケにいる者たちよりもとありますのでテサロニケのユダヤ人は心があまり広げられていない、つまり心が狭かったと考えることが出来ます。テサロニケとベレヤは 80 キロメートルほど離れていますがここではパウロ達のすることが気になって邪魔をしにくるぐらいですからよっぽど頭にきていたんでしょうね。教理の違いだけでなく地域の風土や文化の影響を教会も受けますからテサロニケの教会もそのような影響を少なからず受けていたと思います。パウロがテサロニケ第 1 の手紙の 5 章で「互いに励まし合い、得を高めなさい」と言わなければならなかったのは、お互い励まし合い、お互い助け合う部分が弱かったからとも言えます。

イエスキリストが公に福音伝道をする前にバプテスマのヨハネという人が人々に悔い改めを迫り、そのことを「主のための道備えをする」と言われましたが福音宣教を始める前に人々の心備えの必要なことを思わされます。

イエス様が話された種まきの譬えの話がありますね。(マルコ 4 章) 道ばたに落ちた種、薄地に落ちた種、いばらの中に落ちた種それはみなそれぞれ実を結ばないでだめになってしまった。しかし良い地に蒔かれた種は 30 倍、100 倍の実を結んだと書いてあります。そして解説までしてあってその種はみことばであると書かれています。ここで問題になるのはみことばではなくて蒔いた土地のことです。そして土地とは何でしょうか？それは私たちの心の状態のことです。そして良い地にしてゆくことが私たちのすべきことでもあるように言われています。つまり聖書のことばを聞いて、読んでいる私たちの心の中で一体何が起きているのかを知ることが大切だということです。

それだったら聖書を学ぶ前から決定しているのではないかとかそういう心開かれた人々だけに福音を伝えてゆけばよいとかそんな問題ではありません。まず自分自身がみことばによってどのように取り扱われているのかということです。道が柔らかい土地になるためには相当の犠牲を伴うことでしょう。薄地が耕されるためには下にある大きな石を取り除いたりうち砕くための痛みを伴うことでしょう。いばらの中で成長するためにいばらを切る、つまり選び取ってゆくことと同時に失ってゆくことを経験することになります。良い地となるために自分の心が耕されるために払ってゆく犠牲というものもあるということです。みなさんはどうでしょうか？

ベレヤの人たちは聖書を読みながら変えられたのかもしれませんが、以前からそのような気風があっ

たのかもしれませんが。いずれにしましても私たちの心のあり方は聖書に対してまた神様に対する関係に大きく影響しています。それはまた隣人との関係にも影響しています。日ごろ伝道することに大きな困難を私たちは感じています。しかしその前の段階も大切と考えられます。人と心が通わなかったり人と心でつながることができないで伝えてゆくというのは非常に難しいことです。福音宣教のための学びとか研究よりも以前に人とどのようにつながることができるのかを考えた方が良い場合もありうると考えられます。聖書を語る前に相手と心と心がつながっているでしょうか？つながる前から「あの人は心が頑なだとか」「言わなくても分かっているはずやから言わない」とか全てが相手の問題のようにしがちですがこちらに問題がある場合もあります。私は神学校でも授業の中でよく話をするのですが人と良い関係を築くためには自分が見えていることが大切です。少なくとも自分の中にも何等かの問題があることに気づいている人は良いのですが自分が見えていない人は苦労されるかもしれません。

2) みことばに対する向き合い方

11節に「非常に熱心にみことばを聞き」とあり「はたしてそのとおりにかどうかと毎日聖書を調べた」とあります。このところを直訳しますと「全身全霊を持ってみことばを受け入れ」となります。ただ熱心に聞くということではなく自らのものとするためにあらゆる犠牲を払うといったことにもなると思います。聖書を読み、自分がそこで感じたこと教えられたことを語るということは一般の読書感想とあまり変わりませんし分かち合うということが意見交換や意見発表の場となってしまう恐れがあります。もちろんそこにも主が働いておられるわけですがその時も他者を通じて神様は何を語っておられるのかということに心を向ける必要があります。聖書には信仰は聞くことから始まるとも書いてあります。ベレヤの教会では聖書からまた他の兄弟姉妹から何を神様は教えておられるのかということ非常に熱心に聞こうとしていたことが伺われます。私たちはみことばを用いながら結局は自分の意見を述べているということがよく起きがちです。今みことばを読むという姿勢にいますのでしょうか、それともみことばに聞くという姿勢にいますのでしょうか？ 自分自身確認したいものです。

また「はたしてそのとおりにかどうかと毎日聖書を調べた」とも書いてあります。「はたしてそのとおりに」とは何かといいますと自分が聞いたり読んだことが本当にそうなのか聖書を聞いて調べていた事になります。しかも毎日それをしていたと書いてあります。この様子から「あれ、あの人が言っていたことは本当なのか？」という疑問を持って一向に差し支えない雰囲気があったということにもなります。つまりいろいろ違っていたり間違っていることは誰にでも起こりうることです。でもそれを出してもあるいは言われても互いの信頼関係を損ねない雰囲気を持っていたということになります。間違い探し、ミスを見つけることに終始している交わりからは何も育ってゆきません。信仰生活も年数を重ねてくると知っているつもり、出来ているつもりであったことが結構抜け落ちてしまっているということもあります。また知ったかぶりをするということもあります。父なる神様にたいする理解はどうでしょうか？ あなたにとってイエス様はどのような意味を持つお方でしょうか？・・・もしよく分かっていなかったらいつでも原点に戻って考える素直さがあるのでしょうか？

ここに出てくる「調べる」という言葉はテストをする。調査をすると言った意味を持つ言葉です。つまり聖書を深く調べると共にみことばが生活の中で意味があり主は今私たちの現実の中で確かに働いておられるお方であることを試してみても味わうということになります。

メーカー関係の仕事をされている方でしたら新製品を世に出す時にただ出来たからと言って販売されないと。普通は耐久性とか品質と言った製品自体のテストを何度も試作品を作りながらテスト

されると思います。また作ったものが現実の世の中で果たして売れるものかどうかという調査も並行して必要だと思います。マーケティングですね。ベレヤの教会の人々は聖書を読んだり聞いたりしながら「こう思う」と言った意見や「いいことを聞きました。教えられました」といってそのままにしておくことはせず自分自身の日常にみことばが深く影響していることを体験しながら毎日を送っていたということになります。

3) ベレヤの教会が生み出したもの

12 節に「彼らのうちの多くの者が信仰にはいった」とあります。ベレヤでは特別伝道集会は必要なかったようです。もちろんパウロはそのような集会は何度も持ったことと思いますが、ベレヤでは聖書研究会から自然に信仰者が起こされて行ったと言えると思います。このことから分かってくることはこの集会にノンクリスチャンも大勢参加していたということ、というよりノンクリスチャンも大勢参加出来たということです。ただし最初から伝道のために集会を持とうというのではなく自らの学びではあるのだけれどもそこにノンクリスチャンも自由に参加出来たということになります。

つまり情景を描くとするならば集まったクリスチャンの心は神様が自分自身にどのように働いてくださるのかということに真剣になっていたし目は神様に向けられていた。その姿をノンクリスチャンの人たちが見てそして彼等もまた神様を見上げるようになったということになるのでしょうか。

また「ギリシャの貴婦人や男子も少なくなかった」とも書かれています。ギリシャの貴婦人というのはユダヤ人から見ると異邦人ということになります。つまり神様の選びの中になく人たちであり、異邦人が祭っている異教の神々の悪影響を出来るだけ受けないように排除していた人々である。そのような人々も気兼ねなくいられる場であったのです。これを今流のことばで言うならダイバーシティ（多様性）ということなのです。

私たちの住む日本においてはクリスチャンは少数であるのでマイノリティーコンプレックスに陥りやすいものです。それは少ないがゆえに変に意固地になって妙に優越感や劣等感にひたってしまう傾向のことを言います。また男性もいたとわざわざ書かれていますから当時のベレヤの教会あるいは多くの教会には男性が少なかったと思われまふ。正確な理由は分かりませんが男性と女性の違いということの中に男性は女性に比べて力を求めたりする傾向があったりプライドを気にする面が強いです。つまりあまり弱さを出したり弱音を吐いたりするのを好まないということになると思います。そうだとしたらベレヤの教会においては弱さを出しやすい雰囲気があったのかもしれない。

様々な点からベレヤの教会の様子を見てきました。分かることはただ聖書の勉強をしていたら成長するのはなくみことばに対する態度、みことばに聞こうとする熱心さ、みことばを通じて今も生きて働く主イエス様の御力を体験しようとする思い、さらに深く正しく主を知ろうと聖書に戻ってゆくことがこのベレヤの教会で生き生きとなされていたということです。あの宗教改革者のルターが「我々はみことばによって世に押し出され、またみことばに戻ってゆく」というようなことを語っています。

みことばの約束に基づいて教会は生み出され、みことばが示すように教会はこの地上の歩みをすすめてゆきます。蛍池聖書教会が誰か人間が生み出し、ある熱心な人々によって成り立っているように見えることもあります。何よりもみことばによって保たれ成長していることを覚えたいと思います。みことばを読んだ人がみことばに応答し、みことばから導きを受け、みことばを祈り求めてゆくのです。結局、人ではなく、聖書が人に影響を与えているのです。これからも集う私たちがみことばに導かれ、みことばに励まされ、みことばに素直に応答してゆく群れとして歩んでゆきたいと思います。